25日　火曜

使徒

14:19 ところが、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにした。彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出した。
14:20 しかし、弟子たちがパウロを囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバとともにデルベに向かった。
14:21 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、
14:22 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。
14:23 また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。
14:24 二人はピシディアを通ってパンフィリアに着き、
14:25 ペルゲでみことばを語ってからアタリアに下り、
14:26 そこから船出してアンティオキアに帰った。そこは、二人が今回成し終えた働きのために、神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。
14:27 そこに着くと、彼らは教会の人々を集め、神が自分たちとともに行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。
14:28 そして二人は、しばらくの間、弟子たちとともに過ごした。

Bible Reference 聖書の記述

パウロが多くの人々の反感を買っていたことは明白でしたし、誰もがその信仰に入るなら迫害されることも明らかでした。パウロ自身「苦しみを経なければならない」と言っています。一体誰がそんな宗教を信じるだろうかと思われるほどです。それでも多くの人がイエスを信じて弟子となりました。なぜでしょうか。

1つには明白に「神の国」が語られたからです。それは永遠の命であって地上のあらゆることに優る価値です。ですから救われた人は、たとえ「多くの苦しみを経た」としても、神の国に入るのです。

もう1つはパウロのモデルがあったからでしょう。パウロ自身もこの永遠の命の価値を知っていたので、半死半生に会いながらもまた宣教のためにまた迫害の町に引き返して行きました。人々はパウロやバルナバが払う犠牲を見て、それが本物であることを確認したのです。

この点で私たちは反省が必要かもしれません。犠牲を払わないようにしながら伝道し、絶大な価値を共有できないままクリスチャン生活を送り、苦しみを経るという覚悟のないまま歩み、神の御心を後回しにすることが当たり前になっている…。もしもそのような私たちであるなら、やがて日本には本当のクリスチャンがいなくなるかもしれません。

「もしも救われていなかったら」「もしも福音が伝えられなかったら」と、深く考えてみて、今のままで良いかどうかと主に聞いてみることも、時には必要なのではないでしょうか。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？